

2024.10.17

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

地域日本語支援ニュース こだま 第 448 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

このたび能登地方で発生した豪雨災害により、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。

★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部： <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

---

## ■ともに生きる：日本語ボランティアの方々からの質問に答えて 2■

地域の日本語教室で長年ボランティアとして活動してきた方々からのご質問、「登録日本語教員」について、7月号でご説明をしました。

今回はご質問その2、文化庁の「日本語教育の参照枠」にある「Can do」は、ボランティア日本語教室でも使用しないといけないものかというお尋ねです。こだま編集部で資料を基に整理した回答をお届けします。同様の疑問をお持ちの皆さまの参考になれば幸いです。（こだま編集部）

---

### その2 ボランティア日本語教室における「Can do」使用について

#### ◆寄せられたご質問2

文化庁の「日本語教育の参照枠」にある「Can do」は、ボランティア日本語教室でも今後はこれに基づいて、使用しないといけないのでしょうか。

⇒ご質問の「日本語教育の参照枠」に示す「Can do」は、日本語学習を考える上で、状況に応じて柔軟に参照することができる枠組みです。「Can do」は、ボランティア日本語教室でも使用しないといけないということは述べられていません。ボランティア教室の活動は、本来自主的な活動で、さまざまな特徴があり、それを運営する自由があることが大切です。

したがって、運営する皆様の意志で進められ、一定の手法のみで運営しなければならないという縛り（しぼり）は生じないと言えます。

ただ、日頃の活動の中で、これでいいのだろうか、学習者の満足度を満たしているのだろうか等の迷いや悩みは、誰にも少なからず起こるのではないのでしょうか。

そこで、「Can do」をその枠に縛られるのではなく、別の捉え方（とらえかた）でみたらどうでしょう。

この機会に「生活 Can do」について少しお伝えしてみます。

#### ◆「生活 Can do」

「Can do」の分野別に、令和4年11月に国内各地で生活する外国人が日常生活で遭遇するさまざまな場面の言語活動を例示した「生活 Can do」が示されました。これについて、都道府県、政令指定都市などで行われる地域日本語教室推進事業において、「生活 Can do」の使用が望ましいとされています。「ボランティア日本語教室」まで含むものではありませんが、次のような捉え方でみたらどうでしょうか。

「日本語教育の参照枠」、「生活 Can do」は、これまで重ねられてきた世界の中の日本語研究、日本語支援活動の経験から生まれ、まとめられたもので、学習者が日本語を使って何がどこまでできるかという視点を大切にしています。

「生活 Can do」の枠に縛られるのではなく、それを知っておくことは、学習者の必要とする日本語力を伸ばす上で、客観的な指標をつかみ、活動しやすくなると言えます。自分の担当する学習者のおよその日本語力を理解し、学習者のニーズに沿って、どのような点に力点を置いて支援していけばよいかのヒントを得、それを学習者と共有することができるでしょう。

#### ◆具体的な支援活動のヒントとして

「生活 Can do」を具体的な支援活動にむすびつける助けになるものとして、「つながるひろがる にほんのくらし（つなひろ）」（文部科学省）や「リソース型生活日本語」（AJALT）などがあります。さまざまな場面や会話例などが数多く、整理して提供されており、具体的な活動のヒントとして活用しやすくなっています。ネットで簡単に検索でき、無料で利用できます。実は、「生活 Can do」は、2010年に開発・発行された「リソース型生活日本語」（AJALT）を参考にされたものという点が、2019年度文化庁日本語教育大会の発表で言及されています。

◆込められている 3 つの柱

最後に、「日本語教育の参照枠」「Can do」に込められた言語教育観をご紹介します。  
したいと思います。次の 3 つの柱です。

\*\*\*\*\*

1. 日本語学習者を社会的存在として捉える

学習者は、単に「言語を学ぶ者」ではなく、「新たに学んだ言語を用いて  
社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」である。言語の  
習得は、それ自体が目的ではなく、より深く社会に参加し、より多くの場  
面で自分らしさを発揮できるようになるための手段である。

2. 言語を使って「できること」に注目する

社会の中で日本語学習者が自身の言語能力をより生かしていくために、言語  
知識を持っていることよりも、その知識を使って何ができるかに注目する。

3. 多様な日本語使用を尊重する

各人にとって必要な言語活動が何か、その活動をどの程度遂行（すいこう）  
できることが必要か等、目標設定を個別に行うことを重視する。母語話者が  
使用する日本語の在り方を必ずしも学ぶべき規範、最終的なゴールとはしない。

\*\*\*\*\*

出典：「日本語教育の参照枠」の活用のための手引（令和 4 年 2 月）

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93705001\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93705001_01.pdf)

この言語教育観は、公的活動、市民のボランティア活動に限らず、今後生活  
者の日本語に向き合う私たちみんなの姿勢として非常に重要な部分であり、  
これからも大切にしていきたいと思います。

参考：

文部科学省「NEWS 日本語教育コンテンツ共有システム」

[https://www.nihongo-ews.mext.go.jp/information/framework\\_of\\_reference](https://www.nihongo-ews.mext.go.jp/information/framework_of_reference)

文部科学省「TSUNAHIRO 『生活者としての外国人』のための日本語学習  
サイト つながる ひろがる にほんごでのくらし」

<https://tsunagarujp.mext.go.jp/level00/d02>

AJALT「リソース型生活日本語」

<https://www.ajalt.org/resource/>

---